（解説）翻訳と連帯

―ある日雇い労働者の軌跡―

原口 剛（はらぐち たけし）・森田 和樹（もりた かずき）

1. はじめに

「はじめに」で述べたように、本書の目的のひとつは、鈴木武が数十年の時間をかけて行った翻訳作業の痕跡そのものを貴重な史料として捉え、その意義を提示することである。鈴木武とはいったい何者なのか。なぜかれが朝鮮語の『回想録』の翻訳に着手するようになったのか。かれにとってこの翻訳作業はいかなる意味をもっていたのか。本解題では、解説者らが実施したインタビューをもとに、鈴木のライフヒストリーを再構成するとともに、かれが「朝鮮問題」に向き合い、『回想録』を翻訳するにいたったその経緯を記す。

鈴木が人生の大半にわたって活動の拠点にしてきた釜ヶ崎は、JR 環状線・新今宮駅に近接する全国最大規模の「ドヤ街」であり、「寄せ場」である。釜ヶ崎には往時200軒を超えるドヤが密集しおり、国内外の周縁部から単身男性の労働者が寄せ集められ、建設業や港湾運送業など基幹産業に欠かせない労働力として動員されてきた。経済・社会にとって欠かせない労働力でありながら、ドヤに住まう労働者は市民社会から差別され、その労働や生活は収奪にさらされてきた。釜ヶ崎のほか大規模な寄せ場として、東京の山谷、名古屋の笹島、横浜の寿町が挙げられるが、これらを総称して「四大寄せ場」とも呼びもする。

鈴木は釜ヶ崎を拠点にしつつ、ときにこれらの寄せ場を横断するかたち

で日雇い労働者の労働運動に献身するとともに、自ら日雇い労働者として日々の生活を営んできた。また、釜ヶ崎だけでなく、東京の山谷や名古屋の笹島を拠点とした時期もある。このように釜ヶ崎 - 山谷 - 笹島を横断してきた鈴木の証言は、これまで見過ごされてきた寄せ場の運動史の諸側面を明らかにするような、きわめて重要な資料的価値をもつものである。

だが、それだけではない。筆者らは、鈴木が長い年月をかけて完成させた翻訳行為に、深く心を動かされた。テキストに粘り強く向き合い、ことばを磨きあげていく鈴木の姿は、「知ること」や「考えること」それ自体に喜びを見出す研究者の精神そのものである。重要なことに、その精神を支えたのは、連帯を求め国境をこえようとする想像力であった。

本書には鈴木が手がけた翻訳を掲載しているが、その翻訳行為の意義を示すためには、鈴木が歩んできた人生と闘争史を踏まえることが欠かせない。そこで本章においては、積み重ねたインタビューをもとに鈴木のライフヒストリーを要約し、また、鈴木の翻訳の意義と特徴を端的に示したい。

2. 「基地の街」の原風景

鈴木武は、1949年7月2日、東京都北多摩郡昭和町（現在の東京都昭島市）に生まれた[1]。生まれ育った昭和町は、米軍接収下にあった立川基地に隣接する「基地の街」だった。立川基地には、戦前・戦中の立川飛行場の時代から多くの労働者が連れてこられ、敗戦後も雇用を求めて労働者が集まっていた[2]。鈴木の家族も、そのような労働者世帯だった。鈴木の家系はもともと三重県の桑名にルーツをもつが、戦時中に満州開拓移民として総出

[1] 1954年に昭和町は拝島村と合併し、昭島市が新設された。

[2] 立川飛行場は、1922年に立川陸軍飛行場として開設され、アジア・太平洋戦争中の兵站拠点であったほか、基地周辺には航空関連の産業が集積し、朝鮮人労働者を含む多数の労働者が低賃金で使役された。敗戦後は立川航空基地として米軍に接収され、朝鮮戦争の兵站

で移住し、敗戦後には2年かけて内地へと引き揚げた。しかし、引揚げ後には桑名に戻らず、昭和町にたどり着いたのだった。鈴木の父親は、当初は立川基地に日雇い労働者として雇用されていた。その就労はたびたび首切りにあう不安定なものであり、鈴木の幼少時は「失業労働者」の状態にあったという。

基地の街は労働者や米軍兵士たちを相手に商売する人びと、米兵たちで溢れていた。たとえば、幼少期の鈴木は、駅前のバーに黒人の兵士たちがたくさんいる姿を日ごろ目にしていた。なかでも鈴木にとっての原風景は、飯場に住まう朝鮮人労働者の姿だった。そこで生活をしていた朝鮮の人びとは、戦時中の労働強制動員により中島飛行場などの軍需工場に連れてこられた人びとであった。鈴木によれば、当時通っていた小学校には朝鮮人の同級生がひとつのクラスに3〜4人はいたのだという。鈴木は、朝鮮人の子どもとともに遊び、かれらの住まいであった飯場にも日常的に遊びにいっていた。このときの経験を、鈴木は次のように語っている。

> 立川飛行場ってのは、もともとは中島飛行場っていって、要するにほとんど軍事の街なの。で、こういうところはね、朝鮮人がたくさん集められたの。で、その人たちが飯場に集められて。だから僕が小学生の頃はね、朝鮮人飯場っちゅうのがね、1つ、2つ、3つぐらいあったかなぁ。近所に歩いていける範囲でね。だから小学校の同級生なんかにも〔朝鮮人の子どもが〕ずいぶんいたの。親からはね、「あの子のところには遊びに行っちゃいけないよ」って言われたの。ほいでね、「なんでだ、そんなバカな話あるか！」と思ってね。子ども心にね、反発

拠点として利用された。また、立川基地を拡張しようとする米軍・日本政府の企図に対して周辺住民は反対運動を起こし、1950年代半ばから60年代にかけて砂川闘争がたたかわれた。1973年に米軍は基地の全面返還を決定し、その跡地には昭和記念公園や商業施設が開設・建設されている。

心持ってたの。だから、隠れて遊びにいってた、その飯場にね。うん。だから、飯場の構造もよく知ってた。

ここで語られているように、鈴木の家は在日朝鮮人の集住地域と近接しており、学校生活を送るなかで朝鮮人の子どもたちと友人として自然に交流していた。ただ、そのころの鈴木は、飯場に住む友人たちが朝鮮人であることを知っていたわけではなかった。だから、なぜ親が心もとない言葉をかけるのか理由がわからなかった。しかし、小学校の高学年になる頃、その理由を理解することになった。

その差別の原因がわからなかったわけ。ところが、小学校の4、5年になってね。隣の立川市に朝鮮第11初級学校というのができてね。たくさんそこに転校していったんだ。その新しいところに。それではじめてわかったんだ。あの人たちは朝鮮の人たちだったんだって。はじめてわかったんだ。で、朝鮮の人たちだからということで差別されていたんだって、はじめてわかってね。「これはおかしいじゃないか！」って子ども心に思ってね。

幼少時の鈴木は、友人に対する親の差別に反発心を抱き、のちにかれらが開設されたばかりの朝鮮初級学校に転校した際に、はじめてかれらが朝鮮半島にルーツをもつ人たちだったことを知った。こうして、出自を理由に差別されることを「おかしいじゃないか！」と考えるようになったのである。このような小学校時代の体験につづいて、鈴木は中学校時代にも在日朝鮮人の友人との関係において朝鮮に直接関係する重要な体験をしている。朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）への「帰国事業」である。

で、ところが僕が中学ぐらいになったときにね、かれらの父子が来て

ね、「今度、朝鮮に帰ることになったんだ」って。いわゆる帰国運動が始まったころ。「へぇー」と思ってね、で、「そこはどういうとこなんだい？」って言ったら、「金日成っていうえらい人がおってね、どうのこうの」って言って、「へぇー」って思ってね。「ああ、そんなえらい人がおるんだったら、僕もそんなところ行きたいなぁ」なんて思った。そんなことがあってね、だから、すごく関心はあったの。ただその当時はもちろん、いちいち朝鮮語を勉強しようなんて思ったことはなかったけどね、うん。ただもう、すごく関心はあった。

このように、鈴木は小学校から中学校に通う時期にかけて朝鮮問題に関する関心をもつきっかけとなる体験をしていった。こうした原体験が後の翻訳につながったのかという質問について「もう全部関係あると思う」といい切っているように、鈴木にとってこれらの体験は原風景として内面に深く刻み込まれていった。

3. 大学闘争から山谷－釜ヶ崎の闘争へ：1960年代～70年代

大学闘争から山谷の闘争へ　その後、鈴木は中学・高校の6年間、東京教育大学付属駒場中学・高校に通い、1968年4月、東北大学農学部に入学する。時代はまさに、大学闘争に突入しようとしていた。入学すると様々な党派から勧誘の声がかかり、鈴木は社青同国際主義派に参加した。そうして鈴木は東大闘争へと身を投じ、69年1月18日の東大闘争攻防戦の最中に逮捕され、同年3月には在宅起訴された。裁判のために上京しなければならなくなり、また東北大も大学封鎖に入ったことから、見切りをつけて東京への移住を決意した。じっさいに鈴木が移住したのは神奈川県の川崎であり、69年10月から12月のあいだ、新聞募集でみつけた横浜の鋳物工場で働いた。だが、毎日3時間の残業が当たり前であった労働環境に耐えかねて工場を

辞め、東京の本郷5丁目にあった自立社（東大闘争統一救対・統一被告団事務局）に身を寄せ、専従として活動するようになった[3]。

自立社は、300人以上から成る被告団の裁判闘争に取組んでいたが、専従は鈴木をふくむ3人しかいなかった。鈴木は、近くの魚屋でアルバイトをしながら、裁判所や弁護士事務所を走りまわる日々を送った。また、各救対の状況がすべて鈴木のもとに送られるような、情報集約的な立場にあった。こうした経験に揉まれるなかで、鈴木は、運動の政治の世界を覚えていった。なおこの頃には、所属していた社青同国際主義派を辞めており、党派に囚われない立場から活動に携わっていた。

この自立社での活動のなかで、鈴木の人生を決定的に変える出会いの経験がおとずれた。1972年1月、山谷での活動を積み重ねていた活動家の船本洲治[4]が、『裸賊』と題するパンフレットを手に携えて、自立社をおとずれたのである。鈴木は船本に出会った場面を、次のように記憶している。

> その『裸賊』を持って自立社に乗り込んできたのが船本洲治だった。それで船本がぶちあげた。山谷・釜ヶ崎こそが、要するに革命の主人公だってことをいいだした。そらぁ正確には思いだせないけど、とにかくそのような趣旨のことをね、ぶちあげたの。へぇ〜、すごい男だ

---

[3] 鈴木は、1971年10月まで東大闘争統一救対・統一被告団事務局の専従に従事した。この間、70年6月頃には「居候」していた自立社から居を移している。こうして事務局の専従を辞したのち、鈴木は初めて山谷での日雇い労働に従事し、またその年の12月にはアブレを経験した。その経験を経て、鈴木はふたたび自立社で「居候」するようになった。後述するように、その直後に鈴木は、船本洲治と出会うことになる。

[4] 1945年、「満洲国」に生まれ、広島で育ち、1975年、沖縄に焼身決起する。享年29。広島大学理学部物理学科を除籍後、東京の山谷や大阪の釜ヶ崎で寄せ場解放闘争に身を投じる。その生と死は、いまも多くの人びとに影響を与え続けている。共著に『やられたらやりかえせ』（田畑書店、1974）、没後の著書に、本書の旧版『黙って野たれ死ぬな――船本洲治遺稿集』（れんが書房新社、1985）がある（『新版 黙って野たれ死ぬな』（共和国、2018）掲載の著者プロフィールより）。

図1 『裸賊』第8号

なと思ってね。それが船本との第一の出会い。……顔もね、迫力あったしね。声も迫力あったしね、言ってる内容も迫力あったしね。あれは大概の人間が圧倒されたわ。

また、同年3月に、船本はもうひとりの男を連れてきた。それが、山岡強一[5]であった。インタビューのなかで鈴木は、「船本とも山岡とも出会わ

---

[5] 1940年、北海道雨竜郡沼田町の炭鉱労働者の家庭に生まれ育つ。1968年、東京に出て山谷に入る。東京日雇労働組合（東日労）に加入。1972年、船本洲治らによる暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議（釜共闘）の闘いと連動して、山谷悪質業者追放現場闘争委員会（現闘委）を結成。1979年、東日労時代の仲間・礒江洋一の闘争を受けて、「6・9闘争の会」を結成。1982年、全国日雇労働組合協議会（日雇全協）結成に尽力。1983年11月以降、対皇誠会・互助組合戦の先頭でたたかう。1984年、山谷の映画を撮影中の佐藤満夫監督が虐殺された後、その遺志を継いで映画『山谷　やられたらやりかえせ』を完成（85年12月）。1986年1月13日、東京・新宿の路上で、国粋会金町一家金竜組組員が放ったピストルの凶弾に倒れる。享年45歳。（『山谷　やられたらたりかえせ』（現代企画社、1996）の著者紹介より）

なかったら、その後の人生どうなってたか分からない。……あの二人とあの時出会ったのが、もう生涯を決めたようなもんだよなぁ」と振り返る。72年1月〜3月の出会いは、それほどに大きな意味をもつ契機であった。「しゃあない、この連中と一生付き合うしかない」と腹をくくった鈴木は、こうして寄せ場の労働世界へと足を踏み入れ、以後ひとりの労働者として活動を繰り広げていくのだった。

山谷から釜ヶ崎へ　船本が「流動的下層労働者」と呼んだように、寄せ場労働者は各地を転々とする流動的存在である。寄せ場の労働者となった鈴木もまた流浪を生き、とりわけ70年代には山谷と釜ヶ崎とを行き来した。船本との衝撃的な出会いから半年後、さっそく鈴木は、大阪の釜ヶ崎へと活動を移した。きっかけは、6月にかかってきた若宮正則[6]からの応援要請の電話である。後述するように、この年の5月、釜ヶ崎の日雇い労働市場「あいりん総合センター」でたたかわれた鈴木組闘争[7]において、労働者たち

---

6 共産主義者同盟赤軍派の活動家。1969年の大菩薩峠事件以降に釜ヶ崎を活動拠点とし、72年6月結成の釜共闘に参加したほか、後述する「勝浦飲食店」を開設・運営した。90年に渡航先のペルーにて落命。享年45歳。

7 「鈴木組（鈴木建設）」とは、暴力団が経営する悪徳業者であり、その悪名は釜ヶ崎の労働者内で知れ渡っていた。72年5月26日、センターにおいて数人の労働者や活動家が鈴木建設の求人に応じたが、事務所に到着した段階で提示されていた就労条件とは著しく異なることが判明したため抗議し、最終的には数名が就労を拒否して「トンコ」した。これに対し鈴木組は、トンコした労働者を拉致して報復のリンチの暴力を浴びせ、翌27日はもうひとりの労働者を車に押し込めようとした。身の危険を察知した労働者は大声で助けを求め、まわりにいた2〜300名の労働者の助けをかりて鈴木組の手を逃れ、労働者たちは鈴木組をセンターから追い返した。28日、労働者や活動家がセンターにおいて「なぐった仲間に謝罪せよ！」などの抗議行動を繰り広げたところに、鈴木組は組長を先頭に、十数名の組員が木刀をもってなぐりかかってきた。しかしこの襲撃に対し、まわりにいる労働者はいっせいに反撃し、最終的には組長を土下座させて、仲間にリンチを加えたことを謝罪させた。この出来事は、センターの支配権を手配師から労働者へと奪い返す画期となり、その勢いのままに翌月には暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議（釜共闘）が結成されたのだった（原口剛『叫びの都市』洛北出版、2016）。

は画期的な勝利を獲得し、その勢いのままに翌6月には暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議（以下、釜共闘）が結成された。この労働運動の高まりに対し、警察は徹底的な弾圧を繰り広げ、主要な活動家が次々と逮捕された。この状況を受け、若宮は応援要請を打診し、鈴木はその要請に応えたのである。

1972年7月の初旬、鈴木ははじめて釜ヶ崎をおとずれた。そのとき目にした釜ヶ崎の印象を、鈴木は次のように語っている。

> あの頃はね、万博の後の好景気が残ってたからね。だから凄かった、うん。仕事はいくらでもあったし、人間はいくらでもアブれてたし、しかも当時は今みたいな高級ドヤじゃないからね、要するに部屋に居たってテレビも無いし何もないからね、みんな外へ出てズラっと〔寝ころんでいた〕。西成署の前の通りを当時は「銀座通り」って言ったんだけども、あそこに人が溢れてた。しかも僕が来た時は夏だったからね、部屋に居たって暑いだけだからね。みんな道路に溢れててね、すっごい人だった。

最初に泊まったドヤ「ちとせ」は、1泊200円。ひとつのフロアを上下に分割して細分化した「カイコ棚式」（あるいは「カンオケ式」）と呼ばれる構造で、天井が低く「まっすぐ立てない」部屋のつくりだった。また鈴木は、釜ヶ崎に住み始めたころに勝浦食堂[8]の運営にも関わったが、翌年には店じまいしてしまった。そうして、あいりん総合センター近くのアパートで、

---

[8]「勝浦飲食店」について、岩田秀次は次のように解説している。「赤軍ラーメンの愛称（？）で知られる。三角公園の西、古物屋と食べもの屋の並んだ職安通りの中央にある。日払いアパート天満荘の道路沿いの一ブロックで、奥行きの深い細いスペースの右側にカウンターを設けてある。…活動家やシンパが交代で調理（というほどのことはないが）を担当。めしは普通の食堂よりはるかに盛りがよくて、オケラ（無一文）の労働者にはタダで提供することもある。そういうことが「主義はどうでもエエ、一飯の義理がある」と労働者を惹きつける働きをしている」（寺島珠緒『釜ヶ崎語彙集 1972-1973』新宿書房、2013、p186）。

図2　ドヤ「ちとせ」の外観と内部

（出典）中島敏『定点観測 釜ヶ崎（増補版）』東方出版、2018、p264。

活動家のQらとともに共同生活をするようになった。

ところで鈴木が釜ヶ崎に移住した1972年の夏は、労働者の叛乱が絶頂をむかえた時期にあった。上述したように、同年5月の鈴木組闘争での画期的な勝利を契機に、翌6月に釜共闘が結成された。「共闘」という言葉が示すように、釜共闘とは、位階的な構造をもつ組合組織とは異なり、組織体なき組織というべき運動であった。インタビューのなかで鈴木は、こう表現している。「もう不特定多数の人間が、行動で参加するかたちの、釜共闘だったから。だから、言ってみれば、その日参加した人間が、釜共闘よ」。

鈴木組闘争を皮切りとする労働者の蜂起によって、それまで求人業者や手配師の支配下にあった「あいりん総合センター」は、労働者のための自治的空間へと転化された。さらに釜共闘は、センターを起点として、自治的空間を街全体へと押し広げようとした。そのための重要な試みのひとつが、1972年8月、三角公園において釜共闘が主催した第1回の夏祭りであった。三角公園も、あいりん総合センターと同じように、暴力団・山口組の支配下におかれていた。その場所において「労働者のまつり」を開催する試みは、公園を暴力団から奪い返すことを意味したのである。

7月に釜ヶ崎の住人となった鈴木にとって、夏まつりの実現に向けた闘いは、釜ヶ崎で経験した最初の闘争であった。同時にそれは、初めて暴動

を目の当たりにする経験でもあった。山口組系横山組は、夏まつりを潰そうと夜間に殴り込みをかけてきた。これに対し労働者や活動家は、まつりを守り抜くために防衛戦を繰り広げた。この横山組との闘いが、やがて暴動へと発展していったのである[9]。以下は、インタビューでの鈴木の語りである。

> 何かあったらもう「走れ！」って言って、とにかく走る。暴動ったら、走ることだった。……三角公園の側に山口組系の横山組ってのがのさばってて、夏祭りに殴り込みをかけて来たんだよ。で、それが原因で暴動になって、うん。その時僕は一生懸命とにかく走ってね、とにかく分からないからね、暴動ったら走ることだったよ。

釜ヶ崎から山谷へ　また、このような釜共闘の闘いは東京・山谷にも波及し、山谷では「悪徳手配師追放現場闘争委員会」（以下、現闘委）が結成された。そして、釜ヶ崎とおなじく、すぐさま警察による弾圧が繰り広げられた。この状況を打開すべく、72年12月には釜ヶ崎から約60名の労働者が山谷へと応援に駆けつけた。この山谷への労働者の派遣に際して、鈴木は、案内の役割を担った。この派遣団の組織化のエピソードは、当時の釜ヶ崎ー山谷における闘争のスタイルを知るうえできわめて重要である。

鈴木の語りによれば、山谷への労働者派遣に火をつけたのは、「デカパン」

---

9 西成警察署は、これを「第16次暴動」と数えている。その詳細は次のとおりである。「8月13日から3日間、釜共闘主催の「第一回釜ヶ崎夏祭り」が三角公園で行われた。この期間中、右翼の大日本正義団が押し掛け、釜共闘とこぜりあいとなり、5人を凶準で検挙した。さらに3日間会場付近で警備中の私服員に対し、爆竹を投げつけた少年を逮捕したことに端を発し、地区内労働組合のメンバーが労働者を扇動し、西成警察署に抗議行動をおこし、また一部労働者が50～60人単位となり、新世界でゲリラ行動をとり、自動車、民家、商店等の硝子を破損するなどの暴行を敢行した」（西成警察署防犯コーナー編『あいりんの30年史』、1991、p48）。

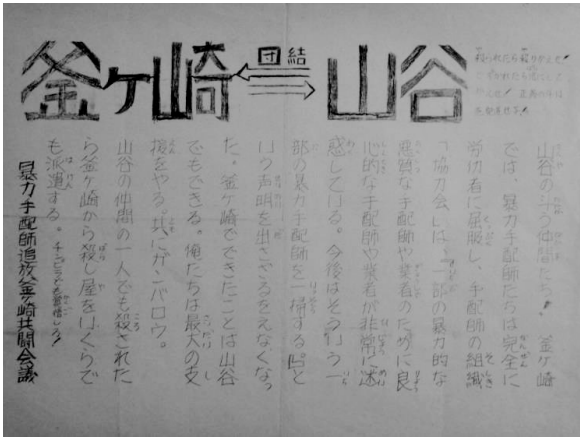

図3　山谷－釜ヶ崎連帯のビラ（暴力手配師追放釜ヶ崎共闘会議発行）

こと鈴木国男[10]であった。ただし、かれが寄り合いや会議を呼びかけ意思決定したわけではない。労働者への呼びかけと組織化は、以下のように行われた。

鈴木　〔山谷派遣への呼びかけについては〕もうとにかく、デカパン〔鈴木国男〕がもう触れ回った。「行くぞ！」「行くぞ！」って。「お前も行けよ！」「お前も行けよ！」っつって。「ああ、行きます」「行きます」って。で、50何人集まった。

原口　っていうことは逆に言うと、集まるまで何人ぐらい集まるかわかんないっていう状態ですよね？

鈴木　うん。だけど、だいたいね、日ごろ顔合わせてる連中だから。

---

[10] 1976年2月16日没、享年33歳。広島大学卒業後船本洲治らと共に山谷入りして活動。「精神障がい者」としてたびたび精神病院にブチ込まれる。1972年から釜ヶ崎に入り、釜共闘の中核をになう。1976年2月16日大阪拘置所の監房で、悪質な看守たちや医師の陰謀で凍死・虐殺される（全国日雇労働組合協議会編『労働者手帳』（1989年、p67）より）。

原口　ああ、そうか、そうか。集まる場所は、やっぱりセンターだったんですか？

鈴木　いや、別にセンターに集まんなかったよ。デカパンがもう呼びかけ回って「行くぞ」「行くぞー！」っつって、「はい、行きます、行きます！」っつって。……「よし、行くぞー！」っつって。どこに集まったんだか覚えてないけど、うん。で、あとは新今宮から行ったんだと思う。そんときにもう50何人集まってた。

こうしてデカパンは、日ごろの交流のなかで顔なじみになっていた労働者に次々と声をかけることで、50名を超える労働者派遣団を組織したのである。鈴木もまた、デカパンに「やってくれ」と言われ、労働者の名簿をつくって引率する役割を担った。大阪を出発した一団は、大垣で「人民列車」[11]に乗り換えて、東京駅へと向かった。また、東京に到着して以降は、鈴木の手配により受け入れ先を振り分けていった。こうして釜ヶ崎からの労働者派遣団は、各所に分散しながら、朝の山谷で合流する体制をとっていた。

釜ヶ崎からやって来た労働者の群れは、山谷で現場闘争を展開していった。その方針は、「ガタくり闘争」と呼ばれる。「現場に入って、大阪の言葉使えば「ガタくる」っちゅうんだけどね。「ガタくり闘争」っつってね。それをあちこちの現場でやり出してね、それで大騒ぎになったよ」。この「ガタくり闘争」の戦術は、もともと船本洲治が提起した方針であり、各グループは競い合うように現場で「ガタくり」を繰り広げた。そうした状況は東京の業者にとって大きな脅威であったことだろうと、鈴木は推察している。

---

[11] 大垣駅と東京駅とを直通でむすぶ唯一の夜行普通列車「大垣夜行」は、安い運賃で東京駅に行くための数少ない移動手段であり、当時は「人民列車」の愛称で親しまれていた。96年3月には快速列車「ムーンライトながら」に置き換えられ、一部区間をのぞき全車両指定席となった。

こうして72年の労働者たちは、釜ヶ崎と山谷を往還し、蜂起を共鳴させるような状況を創出したのである。

冬の時代の闘争：1973年以降　こうして鈴木は、船本との出会いから一年たたないうちに、釜ヶ崎－山谷の闘争の中枢を担うようになっていた。だが73年以降、釜共闘と現闘委のたたかいは、警察暴力と経済攻撃に直面し、窮地に立たされていく。

1972年11月の関西建設闘争は、その皮切りだったといえる。この月、茨木市の関西建設に対する現場闘争がたたかわれた。この争議において関西建設の「親父」は警察を呼び、警察の介入によって33名もの労働者・活動家が逮捕・拘束されたのである。このとき救援を担った鈴木は、この弾圧の意味を次のように語っている。

> 関西建設の親父が警察を呼んだんだよね。それでもう、そっくりやられちゃったんだ。……あれはもう初めてだね。それまでそういうことは無かった。普通はね、奴らもプライドがあるっていうか、ヤクザだからね。そんなに簡単に警察呼ばないんだよ。ところが、あの年の11月くらいの段階になると、奴らも賢くなったというか。警察呼んだ方が早い、っていう考えになってきたと思うわ。まともにぶつかるよりね。……だから多分ねえ、もうその辺でね、意識変革がね、多分出てきたんだと思うわ。で、もう警察頼んでやっちまえ、って雰囲気になってたんだと思うわ。こっちの方もその辺が読めなかったんだろうなぁ、甘く考えてたんだろうなぁ。とりあえずイケイケどんどんで、それでバッとやられちゃって。

さらに73年に入ると、業者は「センターボイコット」を行なうようになった。「つまり、奴らの車がセンターに一切入らなくなった」のである。具

体的には、業者は南海線の高架の西側に求人の車を停め、ガードを超えて入ってくる人間に対して面別〔めんべつ〕をした。そうして、釜共闘の活動家と思しき労働者を選り分けて、求人から排除していった。鈴木もまた「面別」され、排除された一人であった。

1973年2月、釜共闘は横山組追放闘争に乗り出し、この暴力団を釜ヶ崎から追い出すことに成功した。しかし、鈴木によれば、それは釜共闘の「最後の闘争」だったのだという。業者・手配師と警察との連携による弾圧のなかで、中心メンバーは次々と逮捕され、運動は解体させられていった。1960年代末から運動を率い、鈴木を寄せ場へと導いた船本洲治は、あいりん総合センター爆破事件の濡れ衣を着せられて全国指名手配され、地下潜伏を強いられた。そのうえ70年代半ばになると、構造的不況により大量の労働者が仕事を奪われていった。こうして74〜75年ごろには、釜共闘の運動が退潮するなか、内部では組織方針の対立が浮き彫りになっていった[12]。そして76年、新たに釜ヶ崎日雇労働組合が結成されることにより、釜共闘の運動は完全に終止符を打たれたのである。

1970年半ばの時期、鈴木は関東方面の仕事場を転々としたのち、76年10月に釜ヶ崎に帰って来た。だが、このとき「帰ってきてみたら、もう、釜

---

[12] 釜共闘が結成されるまでの組織論をめぐっては、「釜ヶ崎共闘会議にするか、釜ヶ崎闘争委員会か」をめぐって論争があった（寄せ場史料調査会編『風間竜次　証言と軌跡』、2021、p22）。若宮正則ら赤軍派が「委員会」という階梯的組織を主張したのに対し、船本洲治や風間竜次は「広範な労働者が結集するには共闘会議だ」と主張したのである。結果として後者の「共闘会議」が選び取られたわけだが、釜共闘の闘争が退潮させられるなかで、この路線対立が顕在化していった。具体的には、釜共闘は、旅団派・行政班・赤軍系へと分裂し、時がたつにつれ運動のヘゲモニーは旅団派から行政班および赤軍系へと移っていった。ついに76年には、「社会主義か無政府主義か」を問う議論が提起されるなかで、釜共闘の闘争は「無政府主義の誤り」と総括されるに至った。かような総括に対し、鈴木は以下のように評価している。「僕なんかはそうは〔無政府主義の誤りだとは〕思わない。そんなことで、縛りつけたらとてもあんな運動なんてできやしない、うん。いや、どっちがいいとか悪いとかなかなか言えないんだけどね。だけど、少なくとも当時の釜共闘のような運動はね、のちの釜日労のような運動ではとてもできなかった。」

共闘はなくなって」いた。

鈴木　帰ってきてすぐにね、りゅうさんとかケバラに会ったんだよ[13]。「申し訳ない」言われてね。
原口　申し訳ない？
鈴木　「なくなっちまったよ」って言われてね、「へぇー」と思ってね。確かになくなっちまってた、うん。
……
原口　その「申し訳ない」っていう言葉を聞いて、鈴木さんはどういうふうに？
鈴木　「これから俺どうしたらいいのかなぁ」と思った。
原口　運動としても、全体的に、先が見えない時代……
鈴木　うんうんうん、もうお先真っ暗ってやつだなぁ。

後述するように、寄せ場の闘争は、1980年代の山谷において再燃していく。だが70年代半ばの当時はそのような展望を抱きようもなく、「お先真っ暗」の時代であった。ところで、山谷・釜ヶ崎闘争史のなかでは、1970年代初頭と80年代が闘争のふたつの頂点として知られるのに対し、70年代半ばから後半にかけての時期はさほど多くのことが語られず、いわば「空白」の時期とされてきた。だがこの「空白」の時期においてこそ、鈴木は、『抗日パルチザン参加者たちの回想記』の翻訳に着手するのである。この翻訳作業の詳細については5節にて解説するが、その前に、80年代の笹島および山谷での闘争について述べておきたい。

---

[13]「りゅうさん」と「ケバラ」はともに釜ヶ崎の活動家。「ケバラ」はチェ・ゲバラをもとにひねりを加えた通称であり、「りゅうさん」は風間竜次を指す。風間については、「はじめに」の注1も参照のこと。

4. 笹島・山谷での闘争：1980年代以降

笹島時代：「チョン・テイル」デーとドミンゴ闘争　1981年12月、釜日労に、名古屋・笹島から越冬闘争の支援を要請する電話が届いた。笹島では、1970年代半ば以降に寄せ場労働者の運動体が成長しつつあったが、その中心メンバーであった大西豊が大ケガで入院してしまったのである。この要請に応えて鈴木は笹島へと移住し、84年3月までのあいだ笹島を拠点とする活動に携わった。さらに、86年から90年9月までのあいだ、山谷での労働・活動に携わった。すでに述べたように、この1980年代の闘争は、1970年代初頭に並ぶ、寄せ場の運動史のもうひとつの画期であった。1982年、各地の運動が結集する全国組織として全国日雇労働組合協議会（以下、日雇全協）が結成され、新たな闘争の布陣がつくり上げられた。さらに、山谷において、ヤクザ組織である皇誠会・金町一家との熾烈な闘争がたたかわれたのである。映画『山谷　やられたらやりかえせ』は、この闘争の最中に作製されたものである。

1980年代初頭、結成されたばかりの笹島日雇労働組合の書記長を担っていた鈴木は、日雇全協の結成の過程に中心的に関与した。インタビューによれば、鈴木はとくに以下の2点を提唱したのだという。第一に、船本が提唱した「流動的下層労働者」という概念を受け継ぐべきこと、そして第二に、国境を超えた連帯、とりわけ朝鮮半島との連帯を希求すべきこと、である。このような信念を凝縮した取組みが、1982年に開催された「チョン・テイル」デー（「全泰壱」日）であった。1970年11月、虐げられた労働者の解放を訴えて焼身決起し、民主化闘争に大きな影響を与えた韓国の労働者・チョン・テイル（全泰壱）の決起12周年を記念するこの取組みは、以下のように鈴木の提起により実現したものだった。

1982年の笹島で鈴木は、中山幸雄と山岡強一とともに呑み交わしていた。その場で鈴木が提起した「「チョン・テイル」デーをやらないか」と持ち

連帯の炎 準備号

1982年11月13日発行 全協・連帯の炎編集委員会

全国日雇労働組合協議会
監日労・争議団 ☎06 652-4273
堀日雇労働組合 ☎32451-4176
寿日雇労働者組合 ☎45662-5638
山谷争議団 ☎03 872-7081

全泰壱焼身決起から12年、
全国の仲間たちよ、今こそ
韓国労働者との連帯を！

元豊毛紡で600人が籠城（9.30 ソウル）

1970年11月13日、韓国平和市場。
「勤労基準法を守れ」「勤労時間を短縮しろ」「日曜日は休ませろ」と叫び、青年労働者全泰壱は自らを炎につつんだ。労働者の生存権を求める彼の最後のたたかいは、韓国の全労働者のたたかいののろしになった。

1982年6月27日、日本の日雇一下層労働者の団結を求めて全国日雇労働組合協議会が結成された。

いま、1982年11月13日、全泰壱焼身決起12年を迎え、彼とそれに続く韓国労働者のたたかいに学び、共にたたかう一歩とすることをわが日雇全国は宣言する。

日韓労働者連帯のかけ橋を築こう―全泰壱焼身決起12周年集会によせて―
入管体制と日韓体制だ／日韓体制とは
寄せ場と在日朝鮮人
（資　料）元豊毛紡労働組合の立場

図4　「チョン・テイル」デーへの連帯の呼びかけ

（出典）全国・連帯の炎編集委員会編『連帯の炎 準備号』（1982年11月13日発行）

かけ、中山・山岡はすぐさま賛同した。さっそく鈴木はレジュメ（付録資料5）を書き、山岡は「「全泰壱」日の提起に当たって」（『山谷 やられたらやりかえせ』現代企画社、1996年所収）を執筆した。こうして東京・大阪・名古屋の各地で、「チョン・テイル」デーが開催された。このような朝鮮半島との国境を超えた連帯の取組みは、後述するように、「釜ヶ崎反入管通信」の発行以降に脈々と積み重ねられてきた実践があってこそ結実したのだといえよう。

さらに、このような日雇全協結成初期の実践が、名古屋においては思わぬ運動の展開を生み出していった。名古屋での「チョン・テイル」デーは、地域の各労働組合が結集する集会となった。ここで生み出された横のつながりは、翌83年のキャバレードミンゴ闘争の下地をつくっていった。この闘争は、以下のような経緯を経て生み出された。キャバレー「ドミンゴ」の店長や店員は、自分たちの店が経営者の独断で潰されようとする危機に直面し、結成されたばかりの笹日労へ相談を持ち込んだのである。なぜ、キャバレーの労働者と日雇労働者との接点が生み出されたのだろうか。そのきっかけを、鈴木は次のように語っている。

ホステスさんら勝利の自主経営

名古屋タイムズ12月29日号

計画倒産解雇通告

撤回求め赤ハチ巻き半年

労組キャバレー

岩倉

忘年会族も〝共闘〟

以前にまさる大繁盛

フラミンゴ労働組合

図5　キャバレードミンゴ闘争

（出典）フラミンゴ労働組合・ドミンゴ闘争支援員会編『キャバレードミンゴ労働者6ヶ月の闘い――不当解雇から自主営業再開まで』（発行年不明、左 p20、右 p45）

> 日雇全協が結成されて、ポスター作ったの。で、ポスターを、たとえば名古屋だったら、名古屋のあちこちにペタペタ貼ったの。そしたら、かれらがそのポスター見て、それで相談に来たの。あれが正解だったんだ、僕に言わせればね。……もう名古屋周辺、もうあちこち貼りまくったの。

すなわち日雇全協結成を告げるポスターによって、寄せ場の労働者とキャバレー労働者との連帯が生み出されたのである。こうして始まったキャバレードミンゴ闘争は、「チョン・テイル」デーで生まれたつながりによって主要労働組合も結集し、名古屋の労働運動が総力を挙げた「大闘争」となった。

図6　山谷労働者福祉会館建設の光景

山谷時代：金町戦と山谷労働者福祉会館建設　1984年3月、名古屋での活動に区切りをつけた鈴木は、いったん釜ヶ崎へと戻った。だが2年後の86年1月、衝撃的な悲報が鈴木のもとに届く。長年にわたり山谷の闘争を率いていた山岡強一が、ヤクザの手によって虐殺されたのである。この悲報を耳にして、鈴木は山谷へと駆けつけ、以後90年9月までのあいだ、山谷を拠点とする労働・活動に携わった。この時代に鈴木が中心的に携わった諸活動のなかでも、もっとも重要な活動が、山谷労働者福祉会館の建設であった。会館建設の構想は、もともと山岡強一の意思を継いで発案されたものだったが、当初は鈴木は乗り気ではなかった。というのも、「誰がどうやってやるんだ、作ったら誰が運営するんだ、そんなもん何もない」状態だったからである。しかし、そのような鈴木の懸念とは裏腹に、活動家や労働者のあいだで建設への機運は高まりつつあった。

> しゃあない、ならもう全部自力でやろうってことになって。で、全部自力でやるってなったら、「もうしゃあない、俺がやるしかない」ってことで僕が引き受けたのね。……もう、何にもない、金もない、資

材もない、資材置き場もない、加工場もない、人材もない。こんなんでできるかと思った、無茶だと思ったんだけど、もうしょうがない、「やる」となった以上、もう引き受けなきゃしょうがない、みたいな。うん。

こうして会館の建設は、建築家の宮内康のもと、鉄筋を鈴木、鳶・土工部門を神田、型枠大工を金田がそれぞれ引き受け、着工された。鈴木の回想によれば、もっとも感動的な瞬間は、基礎工事であったという。

基礎工事が一番、感動的だった。っていうのは、山谷の労働者が基礎工事にみんな、飛び込んだの。20人ぐらい飛び込んだよ。……スコップ仕事とかね、コンクリート打ちとかね。……「俺たちの会館だぞー！」って呼びかけたら、飛び込んできたの。あんなことはまずなかったなぁ。

基礎工事が終わったのちは、上階部分の技術仕事が主となってくる。会館は、商店街側の壁面が円形になっているが、以下で語られるように、それはこの建築の魂というべき部分であった。

僕らは反対したんだよね。円形なんてややこしい、鉄筋組むにしたって型枠組むにしたってね、もうややこしい。だけど宮内さんは、これだけは俺のワガママを通させてくれ、って。それで、あそこだけ円形になったの。だから僕も鉄筋組むのに、他の人間に任せらんないからね。円形に組めるのなんて、僕しかいないわけだから。

1990年6月、最後のコンクリ打ちを終え、鈴木は「自分のやるべき仕事はやり終えた」と区切りをつけた。同年9月に山谷を去ったのち、ひとりの日雇い労働者として各地の現場を転々とし、やがて釜ヶ崎のドヤ街へと

帰った。そうしてふたたび翻訳作業に向き合い、ついに全巻の翻訳を完成させたのだった。

5. 翻訳のパルチザン

ここまでは寄せ場運動との関わりを中心に鈴木のライフヒストリーを再構成してきた。最後に、本章では鈴木がどのように『回想記』と出会い、その翻訳をはじめたのかについて述べておきたい。

朝鮮語学習の開始と『回想記』との出会い　鈴木が潜在化させていた朝鮮に関する問題意識を再び見出し、翻訳に着手するようになるのは1973年からである。そのきっかけとなったのは、船本洲治が書いた入管問題に関する通信であった。船本は73年2月21日に「釜ヶ崎反入管通信」（創刊号）を発行する（付録資料4）。突如出されたこのビラ風の通信では、まず「鹿島建設は戦前・戦中タコ部屋だった！」という事実が示されるとともに、戦前に日本の大手建設業者が日本の労働者のみならず、朝鮮人や中国人を強制連行して「タコ部屋にぶちこみ、強制労働させ、虐待し、虐殺し、今のように『上品』な会社」になった」ことや、当時の首相田中角栄が朝鮮での事業とそれにともなう朝鮮人労働者の収奪をばねに大資本家となったことなどが大々的に「暴露」された。そのなかでも鈴木が衝撃を受けたのは、花岡事件に関する記述だった。ビラでは、1945年6月30日の花岡鉱山で、強制連行されてきた中国人労働者約800人が蜂起した「花岡暴動」の内実が詳述されるとともに、当時の「生き証人の証言」がいくつか紹介された。鈴木が「僕なんかは当時やっぱり、初めは知らなかったの。で、船本洲治が73年2月に、入管問題についてビラを書き始めたの。で、僕それ見て初めてね、例の秋田県の花岡問題を知ってね。「ああそうか、僕知らんかった。ちょっと勉強しようかな」と思ってね。で、初めて花岡問題なんか調べ始

めてね」と述べているように、「釜ヶ崎反入管通信」の衝撃は極めて大きかった。

しかもその影響は、鈴木個人にとどまるものではなかった。当時、釜ヶ崎労働者のなかにおいても民族差別は克服しきれていない問題であり、運動のなかで朝鮮人に対する差別が露骨に放言される場面もあった。そうした差別的言動を批判するひともなかにはいたが、そのような内部批判は運動の足を引っ張るものとみなす者もおり、それがもとで喧嘩や内紛に発展することもあった。船本の「釜ヶ崎反入管通信」はこのような雰囲気を変えた。実際、鈴木は「朝鮮問題に関する意識はね、釜共闘内でかなり広まった。広まったよ、あの当時」と回想している。釜共闘という集団の性格上、「組織的に議論するっていうことはほとんどなく」、定期的な議論の場をつくることは難しかった。しかし、諸個人が集う場で話が朝鮮問題に及ぶなど「全体的な雰囲気としてはね、朝鮮に関する関心ちゅうのは強まった」のである。

ここで、釜ヶ崎において「朝鮮問題」は、固有の位相をもつものだったことを補足しておく必要があろう。そこには主に、3つの意味合いがある。

第一に、釜ヶ崎における「朝鮮問題」とは、日常の労働や生活にかかわるような、極めて身近なものとして存在していた。たとえば、日雇い労働者である。鈴木によれば、日雇い労働者のなかの在日朝鮮人は、自身の出自を語ることが難しかったがゆえに、その存在が不可視化されているが、少なからず存在していたという。また、日雇い労働者ではないが、釜ヶ崎やその周囲の地域では多くの飲食業者が在日朝鮮人だった。つまり、釜ヶ崎の日雇い労働者たちにとって労働者仲間や日々の生活の糧を提供するものとして在日の人びとが存在していたのである。

第二に、このように身近な存在であるにもかかわらず、日雇い労働者と在日朝鮮人の人びとは巧妙に分断されていた。とりわけ対立の対象となったのは、労働者を雇い入れる飯場の親方や仲介業者に従事していた在日朝

鮮人だった。親方や仲介業者には在日朝鮮人が多かったと言われるが、実際に72年以降、釜共闘は釜ヶ崎で爆発した現場闘争のなかで敵対するかれら親方が在日朝鮮人であるという状況に、たびたび直面したのである。ここに釜共闘は政治的には朝鮮半島との連帯を目指しながら、現場闘争の局面では在日朝鮮人との敵対的関係に置かれてしまうという、矛盾を抱え込むことになった。いいかえれば、日雇い労働者の搾取のシステムである重層的下請け構造とは、そこに民族的な差別と分断が分かちがたく組み込まれているような、政治的な分断支配のシステムでもあったのである。

第三に、上記のような重層的下請け構造下の民族的分断ゆえに、釜共闘の闘争は、労働者の「内なる差別」に直面したのである。したがって、釜ヶ崎において「朝鮮問題」の克服とは、重層的下請構造による分断支配をいかに打ち破るか、という課題にかかわるものであった。

さて、船本の「釜ヶ崎反入管通信」によって日本の朝鮮問題に対する問題意識が広まるなか、鈴木たちは具体的な活動に移りはじめた。朝鮮語の勉強会である。74年に釜共闘に参加していた活動家の林虎三が周りに呼びかけてはじまったこの勉強会は、センター上部にたつ市営萩之茶屋住宅の一室において週1回の頻度で、少なくとも75年までは開催されていたという。講師は林の伝手をたどって朝鮮総聯西成支部のひとに来てもらい、教材は『抗日武装闘争時期における金日成同志の教示』（朝鮮労働党出版社編、1968）などを使った。参加者は4人くらいだったという。そして鈴木は、この本の引用を通して『回想記』に出会ったのだった。つまり、鈴木が『回想記』の翻訳に着手するようになる直接的な契機はこの朝鮮語勉強会であり、ひいては船本の「釜ヶ崎反入管通信」からはじまる釜共闘における植民地問題に対する問題意識の高潮という史的水脈であったといえるだろう。

だが、実は鈴木はこの朝鮮語勉強会ではじめて朝鮮語を勉強したわけではなかった。鈴木はこの勉強会以前に朝鮮語の独学に着手しており、勉強会がはじまる頃にはすでにハングル（가나다라）自体はすでに読めるよう

になっていたという。次の鈴木の回想は、語り方自体は淡々としているが、釜ヶ崎運動史の「空白期」の内実の一端を知るうえで重要なものである。

> もともと興味があったっていうのと、暇だったというかね。それまでの釜共闘の運動というのが下火になってきちゃっていてあまりやることなくなってきちゃってね。それで何かやりたいなぁと思っててね。そういえばこの頃から、興味があった朝鮮語でも勉強してみようか思ってね。それで本屋いったらそういうの〔朝鮮語の学習書〕がたまたまあったものだから、独学ではじめたんだけども。そしたら虎三からたまたま誘いがあったものだから。それなら本格的にやろうじゃないかということになって。

つまり、鈴木や林たちなど、釜共闘に参加していた人びとの一部は、現場闘争が下火になったのを契機に、朝鮮語の「学習」というある種の「陣地戦」にシフトしていったのである。鈴木や林が当初は別々のルートから朝鮮語の学習に取り組もうとしていたという事実からも、釜共闘内部で「朝鮮問題」に関する問題意識が高まっていたことがうかがえよう。

こうして鈴木は朝鮮語の学習会を通して『回想記』の存在を知った。『回想記』のごく一部の日本語訳は、『朝鮮人民の自由と解放――1930年代の抗日武装闘争の記録』（未来社、1971）として出版されていた。本書を読み、鈴木はすっかり「パルチザンのファン」になってしまうほど金日成らの闘争の歴史に惚れこみ、もっと読みたい、翻訳したいという気持ちが高まった。こうして、『回想記』の朝鮮語原本を集め、本格的に着手することになったのである。

『回想記』の翻訳へ　ところで、鈴木が翻訳することになった『回想記』とは本来、どのような性格のテキストだったのだろうか。『回想記』がは

じめて北朝鮮で出版されたのは、1959年である。56年8月のいわゆる「宗派事件」以降、北朝鮮の朝鮮労働党内でソ連派や延安派が粛清されることによって金日成ら満州パルチザン派の影響力が拡大した。その内容を見ればわかるように、『回想記』には満洲地域で活動していた金日成とその仲間たちの闘争経験が回想録として掲載されている反面、ソ連派や延安派の人びとの記録は記載されていない。つまり、北朝鮮における『回想記』の登場は、ソ連派と延安派の退場という文脈においてほかの派閥を排除し、金日成らパルチザン派の正当性を強化する意図があったと考えられる[14]。59年の発刊以降、北朝鮮において『回想記』は朝鮮労働党出版社の手により69年11月までの間に12巻が刊行され、党の督励のもとで大衆的に広く読まれる教養教材になった。また、このテキストは日本にも伝えられ、在日朝鮮人を中心に日本でも少なくない人びとに読まれることになった[15]。

1977年1月4日、鈴木は当時泊まっていたドヤの一室で本格的に『回想記』の翻訳に着手する。朝鮮語勉強会を契機に朝鮮語の勉強をはじめてから3年後のことだった。翻訳をはじめた当初は、『回想記』をすべて翻訳するという考えはなかったという。というのも、鈴木は鶴橋のある書店で『回想記』を数冊落手していたが、すべての巻を揃えられたわけではかったからである。

しかし、1980年、転機が訪れる。その年の5月に韓国で発生した光州事件を受け、釜ヶ崎では夏祭りを開催する際、光州に関する展示を開くことになった。その準備の過程で関連する写真を提供してくれるという朝鮮総聯尼ヶ崎西支部に鈴木らが訪ねていき、写真を借り受け、展示の際には鈴木が説明に朝鮮語も付けるということをした。そうしていくなかで尼ヶ崎

---

[14] 以上の議論については、조은희「역사적 기억의 정치적 활용：북한의『항일빨찌산참가자들의 회상기』분석으로 중심으로」『통일과 평화』제4권 2호, pp.117-119を参照。

[15] 北朝鮮および日本での伝播については、문미라「1950～1960년대 북한의 '혁명전통' 확립 과정과 역사인식의 변화」『역사와 현실』119호, 2021년, pp.253-255を参照。

西支部の委員長が鈴木に関心を持ち、鈴木が『回想記』の翻訳をやっているというと、「『回想録』の翻訳をやっている人間がいるなんてはじめて知った」という返事が返ってきたという。さらに、そのひとが鈴木のことをはからい、手元にない残りの『回想記』を全巻揃えてくれたのだった。それ以降、鈴木は『回想記』の全訳に着手するようになったのである。

体力をかなり消耗する日雇い労働と活発な活動の合間時間を縫って翻訳に従事する鈴木の姿は、まさに「翻訳のパルチザン」そのものである。鈴木は12巻に及ぶ『回想記』と翻訳ノートだけは、大阪（釜ヶ崎など）－名古屋（笹島など）－東京（山谷など）を転々とする間も、決して手放さずに持ち歩いていた。さらに、上述したように、鈴木は寄せ場運動の関連でも各地域を頻繁に移動している。運動の「空白期」を横断し、具体的な空間を越えて繰り広げられる理論上の「陣地戦」、それが鈴木にとっては朝鮮語の『回想記』の翻訳だったのだ。

『特選集』とその特徴　鈴木の翻訳についてもいくつか述べておきたい。まず、訳文は全体として非常にこなれており、読みやすい。ここで細かく検討する余裕はないが、原文と日本語訳を対照させてみると直訳ではなく、なるべく日本語として理解しやすいように翻訳されてある。なお、人名や地名は当初漢字を探すことも考えたが、あまりにも労力がかかるために、すべてカタカナに統一したという。

翻訳文を読みながら目を引くのが金日成に関する訳である。原文では「김일성원수」、すなわち「金日成元帥」となっているのに対し、鈴木の翻訳では「キムイルソン同志」と訳されている。原文の忠実な復元という意味からすれば、たしかにこの訳は「誤訳」に当たるのかもしれない。しかし、この訳には鈴木自身の考えがあった。つまり、抗日パルチザン期においては、金日成も部隊を率いていたとはいえ、パルチザンの同志の一員であり、そこには水平的な関係への志向性があっただろうという歴史理解である。

それは『回想記』に対する鈴木の思い入れとも関係している。『回想記』を読みながら鈴木が見いだしたのは、金日成だけに集約されない抗日パルチザン闘争参加者たちの経験の多様さと生活のあり様であり、それこそ鈴木が『回想記』に惚れ込んだ理由であった。したがって『特選集』に収録されたエピソードでは、金日成が出てくるにせよ、その役割は副次的であり、個々のパルチザンの生活や戦闘経験がよく現れているエピソードが載せられている。

（謝辞）本稿を執筆するにあたって様々な方々にお世話になったが、なかでも上山純二氏、和田康氏、下平尾直氏、前田年昭氏には、資料提供や事実確認などの面で多大な協力をいただいた。ここにあわせて感謝申し上げる。